誰かが言っていた。これは猶予期間なのだと。
ガルグ＝マクの士官学校は、王侯貴族の子弟が多く集う。卒業後の身の振り方はそれぞれの環境によって異なるが、ある者は家督と代々伝わる職務の引継ぎ準備にかかり、またある者は紋章の血統を次代に伝えるための婚姻を結んだ。士官学校で過ごす一年は、自由も贅沢も制限されてはいたが、生徒たちにとっては、大きな庇護の下で自分たちのささやかな我儘を謳歌できる最後の時間でもあった。
「いずれは適当な相手と結婚させられて家を継がなきゃならない。だったら、ここに居る間くらいは好きにさせてもらわなきゃな」
年上の幼馴染がそう嘯くたびに、喉の奥が灼かれるような、苛立ちと息苦しさを覚えた。まるで貴族の嫡子の総意のように言うのが気に入らないからだと、はじめはそう思っていた。
この男が女性関係に節操がないのは昔からだったが、いざ自分も年ごろになり、同じ学び舎で寝食をともにできることには、ほのかに胸躍ったものだった。しかしそれも束の間、目の前で毎日のように放蕩ぶりを見せつけられていると、××××××は胸の内に少しずつ黒い澱が溜まってゆくのを自覚するようになった。
――こんなものは、ただの失望だ。それだけだ。
兄への尊敬とはまた違った憧れを、××××××には抱いていた。いつもはへらへらしているくせにこの幼馴染は、いざというときには自分たちを庇って誰よりも傷つきながら笑ってみせた。今は、その頃の自分の純粋な想いが失われただけだと思いたかったが、なにしろ毎日彼の動向は視界に入ってくるのだ。そのたびに、黒い澱を突きつけられ、その正体に気づけと内側から促される日々は、決して安楽なものではなかった。
そんなときは、決まって訓練場で剣を振るった。
同じく長い付き合いの××××××や××××××を相手にすることや、騎士団員や教師に教えを乞うこともあったが、剣技を磨いているその間だけは、他の考えを振り捨てて無になれる心地がした。
――あいつが寄りつかない場所なのもいい。
しかし寮に戻れば、視線はつい二つ先の部屋に向き、そこにはない姿を探してしまうのだった。

それはある休日のことだった。
××××××はいつものように訓練場で汗を流した帰り路で、修道院の石壁の間の暗がりに何かうごめくものを見かけた。不審なものには咄嗟に目を配る習慣があるせいか、それがどうやら睦み合っている男女らしいと頭が認識した瞬間も、すぐには視線をそらせずにいた。